

毎月一回十五日發行(定價一部五錢一年郵稅共五十錢)



和清山香 校學門絲田 所刷印 所發行 所印刷

講話とこころ (二)

比喩譬句語集

千葉 高島生

挿木に學ぶ

越前の永平寺の炊事場は、寺には凡そ不釣合と思はれるやうな鐵筋コンクリートの三階建てであります...

後の月

千葉縣神崎町の傍に一基の句碑が建つて居る。森郷と云ふ人の句で「足らぬこそ満つるにまされ後の月」と刻まれている...

レオン

人造絹絲は木材パルプを原料とした植物性纖維で、天然絹絲は動物性の纖維であります...

立體的經營

「文化は立體化也」——コナ言葉が成立つかどうかは知りませんが、文化の程度が進めば進む程、人類生活は平面的から立體的に變化してゆく傾向があります...

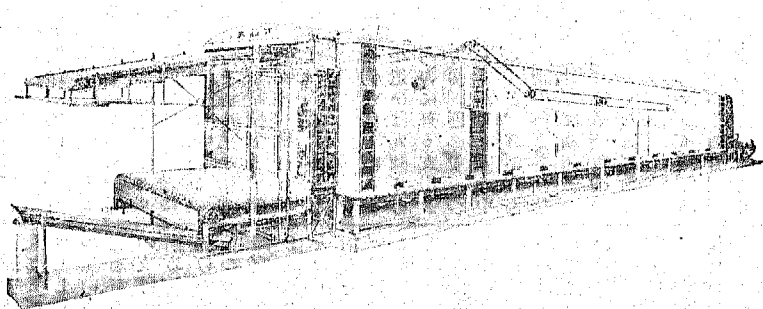
高遠の目標

明治天皇の御製に「大空に舞えて見ゆる高嶺にも、登ればのぼる道はありけり」とあります...

桑九分

蠶作を決定する條件は、蠶種、飼育法、桑葉の三つであつて、その間に輕重の差をつけるとは出来ません...

現代乾繭機界ノ王座 大和式自動輸送乾繭機



二五九六年代表型

【各種型録贈呈】

製作發賣元 株式會社 大和三光商會

東京京橋區京橋三丁目二番地 電話京橋(56)五三二〇番

營業課目 機乾燥機 乾燥機 乾燥機 乾燥機...

ださうです。アメリカのニューヨークは世界第一の大都會であります...

君ヶ代桑園

どこやらの宣傳都々逸に「古くてよいのは味噌、酒、醤油、桑は若株改良種」と云ふのがあります...

泥を吐く

栗 柄 超

樹の緑、草の緑の色褪せて次第に灰色が... 昨夜も匪賊が出た。鯖江の兵隊が二名奇襲を受けて殺られてしまった。

蠶絲學雜誌九ノ一原稿募集

最近九ノ一蠶絲學雜誌を御送りした管ですが、直ちに九ノ二の編輯に着手しました。御投稿を歓迎いたします。

年賀廣告募集

例に依り本紙明年一月號に登載する年賀廣告を募集致します。年賀廣告は収入豫算の最も重要な部分を占め之が減少は本紙の經營に少なからず脅威を與へるものであります。

十一月十五日 千曲時報編輯係

あの家も、この橋も、三度此の地を訪れた僕たちにとつてはみんな懐かしいものばかりで時折、顔見知りの村長や署長に會ふのもうれいものだ。

與へられたる三十日の旅行期間も、もうその半ばを過ぎた。今、牡丹江にゐる。明早朝この地を出發して勃利、密山、穆稜の三縣を経て再び牡丹江經山哈爾濱に歸り、更に長嶺海拉爾に行つてみたい。

何の變化もない大陸に移つてもう半歳、秋の運動會の花嫁行列を演出して叱られた情ない追憶は遠い昔の話である。

一人と書きとめらるゝ夜寒かな古い句をおもひうかべて、田も畑も川も道も凍りつく北風の夜ぞらに懸る冷い月を眺めて、そぞろ旅の淋しきをおもふ。

先日友人の來訪を受けた際、君は最近少しも千曲時報へ書かないではないかと言ふ事その時は確か會費を納めないから遠慮してゐるんだと言つて置いたと思ふ。然し別に會費を納めないで遠慮して居る譯ではない。僕は會費を納めない

事は重々悪いと思つて努力して居るが、云つてそれを『遠慮』に迄及ぼす程深く考へて居ない。學校だからと思つて、その中に云ふ氣持と相俟つて甘へる氣持が多分にあるからだ。勿論かうした事に嚴格を旨とする様な石金氏にあつたら外道呼ばりをされるだらうけれど。

それに依ると、緒言として現代に於て最も進んだ高利貸と云ふのは月賦販賣に止めを刺さうである。細かい数字は忘れてしまつたが、昔年からの高利貸等は元の金の回収が不安定で總体的に見ると月賦販賣には遠く及ばない。月賦販賣が何故現代成功してゐるか等はもう必要はないからこれ丈の語にして置いて、之を千曲會費徵集法に及ぼす。

目を通じて現時婦人關係の雜誌を瞥見すると、家計に關する研究が往々にある。その結果に依ると五十圓から百圓迄の収入家計に於ては『主人小遣』としての支出は平均總支出の十五%である。之に依つて最低七圓五十錢、最高十五圓の内ふ事がわかる。ところでその小遣ひの内容を見ると、會社に於ける諸積立金、個人的な趣味費(茶會、釣會、旅行會等々)、同窓關係費及び書籍購入費等がそれである。

此處で一考するに、今例へば月額八十圓の家計に於ては主人小遣ひは九圓である。この内から以上の内容に亘る支出を一つ當り一回宛とするも男 匹必ず三つや四つは關係するであらうから九圓の中四圓内外は定支出である。と言ふ迄もなく残つた五圓内外が所謂小遣ひとなして月額五十圓の収入家計では關係三つとして月額は四圓内外である。百圓の収入家計に於ては關係も多くなるであらうから十圓とは残るまい。

話の末が見えすいてアサマシイ様であるが此處で問題にしたいのが千曲會費の度々お目にかゝる五圓也の集金郵便である。五圓也は前記殘額の一部として七〇%を占める。僕は決して會費として五圓の多寡を論ずるのではない。五圓と云ふ

金額の吾々中小僱給生活者の支出に於ける重要性を論じ其の集金方法に就いて一考するの目的である。重要性を認めて呉れたら先に進む。

擬て此の問題を如何に解決するかは目的である。再三言ふ様だが相一支出無しでは暮れない。乞食だつて相應の支出はある。況んや吾々現代的多趣味有職無産階級に於てをや。然し忘れて居る頃(知つて居たつて同じ事)集金郵便で五圓持つて行かれたのは否應無しに文無しにならざるを得ない。前掲統計結果の示す通り百圓階級でやつと殘金五圓である。五十圓階級の主人は一ヶ月死に等しい。従つて集金郵便は涙を呑んで突返す。集金郵便を出した當事者は相當腹の立つ事と思ふがそれは斯くの如き理由がある。

此處で前述の「現代の高利貸は月賦販賣なり」と云はしめた原因の一部がものを言ふ。即ちこの五圓の月割集金法が求める集金方法である。支會が之れを行ふか又は職場別に一人の責任者を置いて之れを行ふ。

之れを具体化して行へば必ず集金は九%まで成功する事と思ふ。一〇〇%を自信し且望み度いのであるが、出す意志の無い者は別だからである。充分納める意志があり、而かも月割であるなら何んの支障も無く出せるものを、何等一時に集めねばならぬ理由なしに一時に薦が油揚げを渡ふやうに集めるのは無意味だ。この方法に依つて、例へば五圓を五十錢宛十ヶ月間に分納する事とすれば、五十圓階級の者も尙三圓五十錢内外の保金者となり得る。夫れ百圓階級の者に在りては何んぞ一夕の豪遊に事缺かんやだ。

責任者を置くとしても、千曲會の主義に依つてどうせ無給責任者であらうから此の方面の經費は不用である。送金に要する費用だけ見れば良い。却つて餘裕を生じて、例にはみずゞ餘位同窓一同に送れるかも知れない。どうして斯かる方法の行はれない所はそれ迄だ。ナホレオンで無いからそう意氣張らなくても宜しい。いくら貧しても五圓位はとか、それ位自分で平常から心懸けたらとか云ふ輩に對しては將來間違つても總理大臣にはなれない者と斷じて今から銀袖一觸して置かぬ。又ボーナス一時拂ひを主張する輩に對して然り。古人曰く「金持はケチなり」と。

集金郵便恐怖症諸兄以つて如何となす。

上田便り

モーターサイレン變更 上田市のモーターサイレンの朝の時報は午前五時で...

定期旅客機寄航中止 日本定期航空運輸會社は東京—長野—新潟間、大阪—富山—長野間旅客機寄航コースを十月一日から開始する事となつてゐるが...

上田飛行場擴張敷地の引渡終了 陸軍上田飛行場擴張三万坪敷地は十月十日を以て全部買却承諾済みとなり...

傑出せる 石井鶴三氏の作品

讀賣新聞に相良徳三氏が院展の彫型を批評してゐる。其の七日目の最後の一節石井鶴三先生の作品の事が書いてあつたから左に抜書して紹介する事にする。

最も傑出してゐるのは(之は院展の全作品中で最も傑出してゐる意)石井氏の「老婦相槌」である。兩肌を脱いで、きちんと坐つてゐる老婦人の體は、この上もない寫實主義である。單に形態上の正しい寫實に止まつてゐるのではなしに、老婦人の心情までも琴瑟せしめるものがある。この作品を見てみると、私達の心は表現された形態と心情との間を微妙に反復擧動して瞬間々々の一寸した動作をも想像することが出来るし、盡きない妙趣を汲むことが出来る。其處には一賦の感傷もない。而も生新な何物かゞ到る處に感じられる。私はこの作品と、同じく石井氏の「針塚氏肖像」とを場中の双壁とするに躊躇しない者である。

岡譲二、井染四郎、小林重四郎外廿數名を引連れて十月五日朝來田、午前中上田公園、午後菅平高原で撮影して即日歸京した。

上小青年野球大會 上田体協主催第九回上小青年野球大會は横町、長瀬地蔵クラブ、室賀田中組、泉田吉福クラブ、縣村全田中、滋野青年學校、神川クラブの七チーム参加の下に十月十日、十一日の兩日市營球場に舉行、優勝は神川對長瀬地蔵クラブにて廿二對二で神川に凱歌が擧つた。

上田飛行場擴張敷地の引渡終了 陸軍上田飛行場擴張三万坪敷地は十月十日を以て全部買却承諾済みとなり...

染織展及生産展 長野縣上田染織試験場では十月十四、十五の兩日染織即賣展を開催、生徒の製作品即賣、作業公開の外北信染織懇談會、農村副業品、信州刺繍會等の出品陳列即賣を行ひ、之に呼應して商工會議所に於ては十四日より十六日迄上田生産品即賣展、電気、瓦斯器具展覧會、和洋料理、菓子展覧會を行ひ、尙餘興として會議所前の廣場にて藝妓、女給等の手踊、小柳連の茶番狂言等が非常に非常な人出であつた。

菅平初雪 上信國境四阿山、猶嶽には十月廿一日朝中腹迄白銀の世界と化し本年の初雪を見た。昨年より廿一日早く例年より一ヶ月早い初雪である。早期初雪を見た年は年末に迫つての降雪が少いのを例とするので地元團體では心配してゐる。

山邊常重氏代議士に繰上當選 第二區選出代議士春日俊文氏は九月十九日例の五私鐵選事件で衆議院議員を失格したので、十月廿三日次點者山邊常重氏が繰上當選と決定した。

武徳殿着工 武徳會上小支所の武徳殿は上田市木町出身東京手塚守二氏から本館建設費として七千六百圓の單獨寄附を得て急速に進捗したが、當初稅務署廳舎跡の古材を用ふる豫定を全部新材に變更した爲め九千五百圓となりたるを更に同氏は二千四百圓を追加寄附し十月廿一日公園内招魂社東側の現場で起工式を行つた。附屬建物の工費三千數百圓は地元の上小有志に依り繰上るものと見られ明春四月盛大なる竣工式を擧げる豫定である。

菅平鹿澤の収容力四千名 菅平及新鹿澤スキー場に於ては愈々シーズン目を迎へんとし準備に万全を期してゐるが、本年の収容力は菅平二千四百四十人新鹿澤一千六百六十人、舊鹿澤五百五十人合計四千六百六十名で都會地からどれ程スキーヤーが殺到しても全部収容する丈の能力を持つ事になつたがスキー貸及宿泊料は左の如くである。

△スキー貸 菅平二百圓、一日三十錢、新鹿澤三十圓、一日二十錢  
△旅館宿泊料 (菅平) 菅平ホテル、高原ホテル、菅平園、四阿山其他一圓五十錢、民家一圓三十錢乃至一圓十錢 (新鹿澤) 鹿澤館、鹿鳴館、増屋、小増屋一圓八十錢

菅平ハイイルと新別所温泉小唄 實際スキー場菅平と湯の町別所温泉の紹介及宣傳の爲め觀光協會、温泉、商工會議所では從來のものより一層大衆的に親しめる小唄レコードの作成をコロムビア會社に依頼先般作曲家高橋伸太郎氏が現場を視察し左の如く作歌し古關祐而氏作曲にて、吹込は「菅平ハイイル」を松平晃、「新別所温泉小唄」を青丸にて來月惠比壽講前に發賣の筈である。

菅平ハイイル 1、スキー抱へてホテルの一夜 明けりや馬橋の鈴音はるか 2、胸にさらけ粉雪とんで 3、招くアルプス千里も一里 4、光る處女雪ふたりで行けば 戀のシニョール心に殘る (以下同様)

別所温泉小唄 1、ハイいと來てき 湯の香が残るヨ 胸にや情の香も殘る 2、別所よいと湯が招く 3、ハイ 逢へば七くり七湯は更けてヨ 夢に湯の香がほのぼのと (以下同様) 4、ハイ 花に逢はせて涼みに通よ 今ぢや石湯のふかい仲 (以下同様)

繭收入前年より減少 本縣蠶絲課調査に依る縣下四十四市場の秋繭平均値段をみると白繭最高六圓二〇錢四三掛、最低二圓五錢三三掛、平均四圓七九錢三九掛、前年は六圓七〇錢四一掛、二圓九〇錢三〇掛、四圓八八錢四一掛となつて居り、黃繭は本年最高四圓五錢三掛、最低二圓七〇錢二七掛、平均三圓六二錢三〇掛前年四圓三〇錢四〇掛、二圓八〇錢三七掛四圓七錢三三掛で白黃繭共に前年より安値を示し平均に於ても本年は四圓七九錢三九掛、前年は四圓八八錢四一掛と同様低落してゐるが之は昨年は繭相場が尻上りしたに比し本年は逆に晩秋蠶が尻下りした關係である。然し取引數量は百九十九万七千九百九十貫、價格五百七十三万四千七百七圓である。

上小繭市場出廻五千貫の増加 本年度晩秋繭の出廻り(九月十日)狀況を見ると左の如くであるが、上田への出廻りは四分の一に減少し上田中心の大造作と共同販賣への動きが見られ、丸子、田中は前年比に比し多少の増加を見せつゝ、尙昨年に出廻り相場に比較して貴當平均七十七錢の値下りのため、總出廻り八万二千九百一貫で六万一千八百二十四圓の減收となつてゐる。(括弧内前年)

秋蠶期の早害百圓 蠶取上田支所調査に依る上小本年度秋蠶晩秋蠶に於ける桑園早害作柄不良損害高合計は百十八万八千七百九十九圓七十錢と判明、今年の變態氣温が養蠶に與へた影響の大きさを物語つてゐる。

秋蠶期の早害百圓 桑園早害 上田三百二十町歩一万千八百八十圓、小縣三千八百二十町七反十四万五千五百三圓、計四千四百廿二町七反十五万二千六百八十三圓、損害桑量百一十七万九千九百貫、桑害に依る收繭不能金額六十九万三千三百六十四圓七十錢、(貫毎四圓九十錢換算)

秋蠶期の早害百圓 桑園早害 上田三百二十町歩一万千八百八十圓、小縣三千八百二十町七反十四万五千五百三圓、計四千四百廿二町七反十五万二千六百八十三圓、損害桑量百一十七万九千九百貫、桑害に依る收繭不能金額六十九万三千三百六十四圓七十錢、(貫毎四圓九十錢換算)

秋蠶期の早害百圓 蠶取上田支所調査に依る上小本年度秋蠶晩秋蠶に於ける桑園早害作柄不良損害高合計は百十八万八千七百九十九圓七十錢と判明、今年の變態氣温が養蠶に與へた影響の大きさを物語つてゐる。

秋蠶期の早害百圓 桑園早害 上田三百二十町歩一万千八百八十圓、小縣三千八百二十町七反十四万五千五百三圓、計四千四百廿二町七反十五万二千六百八十三圓、損害桑量百一十七万九千九百貫、桑害に依る收繭不能金額六十九万三千三百六十四圓七十錢、(貫毎四圓九十錢換算)

秋蠶期の早害百圓 桑園早害 上田三百二十町歩一万千八百八十圓、小縣三千八百二十町七反十四万五千五百三圓、計四千四百廿二町七反十五万二千六百八十三圓、損害桑量百一十七万九千九百貫、桑害に依る收繭不能金額六十九万三千三百六十四圓七十錢、(貫毎四圓九十錢換算)

秋蠶期の早害百圓 桑園早害 上田三百二十町歩一万千八百八十圓、小縣三千八百二十町七反十四万五千五百三圓、計四千四百廿二町七反十五万二千六百八十三圓、損害桑量百一十七万九千九百貫、桑害に依る收繭不能金額六十九万三千三百六十四圓七十錢、(貫毎四圓九十錢換算)

秋蠶期の早害百圓 桑園早害 上田三百二十町歩一万千八百八十圓、小縣三千八百二十町七反十四万五千五百三圓、計四千四百廿二町七反十五万二千六百八十三圓、損害桑量百一十七万九千九百貫、桑害に依る收繭不能金額六十九万三千三百六十四圓七十錢、(貫毎四圓九十錢換算)

母校ニユース

清水教授送別會 九月廿五日下午五時より總宜亭に於て今回退職せらるる事となつた清水教授の送別會を開催す。出席者は針塚校長以下母校職員四十一名に達し針塚校長及石倉前副校長の挨拶、清水教授の謝辭にて宴に入り七時頃阿形講師發辭にて万歳を三唱し散會した。

製絲科三年生の見學旅行 製絲科製成科二年生は志田講師引率の下に京濱地方見學旅行を行つた。十月一日午前五時四十分上野驛發、農林省蠶業試験場、横濱生絲検査所及び東京朝日新聞社、東京科學博物館等を見學し其他各所の視察を遂げ充分に旅行の目的を果して五日午前五時四十分上野驛にて歸着したが一同至極大元氣であつた。

成瀬次男氏退職せらる 圖書課勤務員成瀬次男氏は一身上の都合に依り十月五日附を以て退職せられた。當分は大連市秀月台中村實氏方に滞在して居られると承る。同氏は十七年七月の勤續で運動競技をよくされ野球部、庭球部等の名コーチアであつた。

日本文化講義第二回 日本文化講義第二回として十月五日午前十時より二時間に亘り講堂に於て國學院大學々長文學博士河野省三氏より「我が國體と日本精神」と題する講義があつた。

文部省視學委員來校 文部省視學委員として東大名譽教授麻生廣次郎氏が十月五日、六日の兩日母校を視察された。松田明文氏圖書課新任 義に退職せられし瀧澤敏次氏の後任として松田明文氏が職員として十月十日より新任される事になつた。同氏は昭和十年の上野中學出身である。

濱村一彦氏榮轉 養蠶科原蠶部勤務副手濱村一彦氏(蠶一九選)は十月十二日附を以て退職、下高井郡産蠶處理指導員として榮轉され長野縣蠶業取締所中野支所に駐在される事になつた。尚ほ同氏は最近良縁を得て十一月十六日御結婚式を挙げられる由である。

山崎曾録氏新任 養蠶科事務室勤務の副手山崎曾録氏(蠶一七)は今回養蠶科圖書部に轉せられその後任に山崎曾録氏(蠶一九)が十月十二日附副手として勤務せらる事となつた。母校紡織科勤務講師小林尚一氏(紡八)は良縁を得られ

十月十三日柳町大神宮に於て華燭の典を挙げられた。新夫人は上田市絲町大塚稔氏令妹辰子嬢と云ひ上田高等女學校出身の才媛である。

清水教授送別會 紡織科教授清水寛孝先生は一身上の都合に依り十月十四日附退職された。同先生は紡織科創設當時擔任された職責に於ける功績が著しく、又庭球部長として令名があつた。

美術展の母校入賞者 十月十六、十七、十八の三日間市公會堂に於て上野毎日新聞主催の第三回美術展覧會開催され出品數三百六十點、其の外に信州出身作家特別出品も十數點あり、審査員は日本畫壇非寛方氏、洋畫は倉田白羊氏、寫眞は高桑勝雄氏、書は比田井天來氏、彫塑は石井鶴三氏、工藝は倉田白羊氏の一流揃ひで入選中母校關係左の如くである。

△寫眞 堀口稻三(山二種) 井上柳梧(秋の訪れ) 穂野功(瀧澤の朝霧、美ヶ原風景、ジャングルム) 井上柳梧(小スキーヤー) 特選 △洋畫 赤尾文顯(風景二種) 小林敏(山崎川上流) 石倉新十郎(高原の夏村、山崎の夏村)

清水教授送別會 清水前教授は十月二十日午前十時四十分上野驛發下り列車にて鎌倉中を名古屋へ出發されたが驛頭には校長以下母校職員の一部及び紡織科學生、藥手全部等が見送つた。

實射撃 十月廿二日、廿三日の兩日に亘り市營射撃場に於て全校生徒の實射撃を行つたがその成績は五發五十點滿點にて優秀者左の通りである。

一、四十二點 紡二 野村 英夫  
二、四十一點 蠶三 橋本 正太郎  
三、三十九點 紡三 柳澤 六平  
三市蠶絲關係球リグ戦 第八回上野市、長野三市蠶絲關係球リグ戦は十月廿五日午前九時より市營コトに開かれ各市より七組出場、四時半終了したが左の如き戦績で各市の得點は松本五十一點、長野卅三點、上野廿四點で松本優勝した。各市二組選抜の勝抜では長野縣應の小倉、小暮組が優勝した。試合後當貴で懇親會を行つた。明年は松本に開催の豫定である。

得點試合  
山下 熊谷 四一 上田 佐藤 六川  
山野 熊谷 四一 竹内 小川  
酒井 横澤 四一 倉澤 松岡  
川村 田村 四一 齋藤 熊谷  
市川 河田 四一 湯原 高野

霜古田高橋 四一 櫻井 野口  
森田 丸山 四一 小林 北島  
計 二八 八

安川 日高 二 竹内 松岡  
酒井 宮原 一 佐藤 六川  
小倉 小暮 四 倉澤 松岡  
計 一六 一六

山下 横澤 一 小倉 日高  
酒井 熊谷 四 安川 丸山  
市川 田村 四 酒井 宮原  
川村 河田 四 千原 武田  
霜古田 高橋 三 山田 高山  
森田 丸山 四 一 宮坂 戸谷  
計 二二 一七

選抜試合  
小倉 小暮 四 二 竹内 松岡  
安川 金崎 〇 四 倉澤 湯原  
小倉 小暮 四 一 倉澤 湯原  
横澤 酒井 四 一 金崎 酒井  
水野 熊谷 二 四 小倉 小暮  
横澤 酒井 二 四 小倉 小暮

都合上上野對松本は行はなかつた。  
談話會 十月中の談話會に於ける講師並に演題は次の如くである。例に依つて毎金曜日後四時より第十一教室に於て開催された。

一、螢發光の新説 平尾孝平 片岡金一  
二、総不同防止の一方 小林清丸  
三、瓦斯封入電球の話 松浦彰義  
十月二十三日  
一、生絲の燃焼時に於ける炭素瓦斯發生源 坂口育三  
二、生絲を褐色化乃至暗色化する一分岐菌に就て 坂口育三  
十月三十日  
一、植物ウイルス病鑑定の一方法 倉澤恒夫  
二、家蠶蛾の定性に就て 宮坂 收  
教育勸語奉讀式 十月三十日午前八時より講堂に於て教育勸語奉讀式を舉行し最初職員生徒に對し勸語を奉讀し終つて生徒のみ退場、教職員に下賜された勸語の奉讀式があつた。

西澤喜美氏履員となる 紡織工場に業手として勤務せられし西澤喜美氏は今回庶務課に轉せられたが十月卅一日附を以つて履員に昇格された。同氏は昭和七年上田高等女學校出身である。

養蠶科三年生卒業製作題目  
一、桑葉中の細菌數調査 (佐藤利教授) 有間 正久  
二、天柞蠶及柞樹加害昆蟲の生態的調査(附)天蠶胃液と絹絲腺との關係 (倉澤教授) 植村 滿義 武井仙太郎  
三、春伐及び立通桑の飼料的及び肥料的成分量に就て (須田助教授) 小木曾眞佐雄  
四、家蠶の脈搏とテンペレチャイロヒヨクンに就て (蒲生教授) 加藤 沼二  
五、滿洲國柞蠶繭業に就て (倉澤教授) 桂 元三 植村 滿義  
六、桑の新古種子に就て (遠藤教授) 兒玉 新一  
七、蠶兒中胃の細菌數と糞中の細菌數との關係に就て (佐藤利教授) 小柳 源一  
八、樺葉に於ける四五齡用老木及び若木の成分に就て(須田助教授) 齋藤 修一  
九、軟葉硬葉を給與したる場合の蠶體水分量に就て (山口助教授) 佐藤 雪雄 二木 三雄  
一〇、蠶兒生殖集の發達と第二次分化時期との關係及び一頭育と普通育との成績 (佐藤春教授) 鈴木 俊夫 戸塚 一  
一一、蠶の生長曲線とその生育に伴ふ體質の變化 (井上教授) 多田 忠正 辻 義男  
一二、桑葉並に蠶體に於ける吸血性細菌に就て (佐藤利教授) 玉田城三郎  
一三、腸病質の抵抗力に就て (佐藤利教授) 原田 正次  
一四、桑葉の水中貯藏に就て (遠藤教授) 原 利夫  
一五、蠶卵の寄生能力と桑葉の飼料的價値に就て (山口助教授) 馬場 順一  
一六、絹絲腺のファイブリン、セリシンの定量及び桑葉中のカロチンサントヒル色素の定量 (金子教授) 望月 藤夫 星野 莊次  
一七、絶色障害と起蠶との關係 (蒲生教授) 堀口 稻三  
一八、桑樹の繁殖法に就て (遠藤教授) 丸山 保夫  
一九、線蠶上縁と繭層重、絹絲腺重及び産卵數に就て (佐藤春教授) 宮下 弘 本居 高行  
二〇、ニンニクの白癩病豫防的價値 (佐藤利教授) 横内 一郎  
二一、桑樹の摘葉が桑質に及ぼす影響 (遠藤教授) 芳谷 富雄

製絲科三年生卒業製作題目

- 一、多條綫と座綫との生絲品質の比較及び織物に對する影響に就て (須田助教授) 平澤和司男 富士 巖  
二、添着回数に關する研究 (林教授、鷹野講師) 三澤 謙 首藤 行雄  
三、低温着繭の研究 (萩原助教授) 山口 直吉 深美 政人  
四、異種繭の混合繭に就て (林教授、鷹野講師) 小泉 辰雄 三宅 靜雄 森福 一郎 小松 正敏  
五、多條綫に於ける繭絲速度と繭絲成績に就て (萩原助教授) 青木 靜志 安部 重 多川 澄平 古田 力  
六、乾燥程度が生絲の品質に及ぼす影響 (須田助教授) 川村 千尋 西原 美登 山寺 豊一  
七、繰絲器械の自動化に就て(主として接緒節の研究) (須田助教授) 石松 博 福本 貞雄 本庄 昇  
八、煮繭處理に依る小蠶の除去に關する研究 (萩原助教授) 叶澤 弘 羽田 滿 土生 珀二  
九、解舒綫長と生絲品位並に回轉率に就て (林教授、鷹野講師) 小林 相模 土屋 二三男 村上 義美  
一〇、煮繭の生絲品位に及ぼす影響 (萩原助教授) 市村 正 東島 藤次郎  
一一、産繭處理問題に就て (林教授) 赤尾 文顯 小口 正晴 和田 利章

校友會ニユース

剣道昇段編入発表 剣道部では十月八日附を以て左の通り昇段編入を發表した。

- 三段ニ進ム 紡三 千吉良長二
- 二段ニ進ム 蠶三 齋藤 修一

- 初段ニ編入ス 紡二 高橋 卓爾
- 一級ニ進ム 蠶二選 渡邊 吉郎

- 一級ニ編入ス 紡一 小川 典二
- 二級ニ編入ス 蠶一 長澤 四郎

- 野球部山梨高工に大勝 母校對山梨高工定期野球戦は九月廿七日甲府へ遠征したが、雨の爲めに中止となり今度は山梨高工より來校、十月十一日午前十時より市營球場に於て山梨先攻にて開始、母校猛打を浴せしA對Bのスコアにて大勝した。スコア及メンバー左の如し。

- 山梨 0010000001
- 123456789
- 山梨 00001360A
- 10A 2

- 山梨 0010000001
- 123456789
- 山梨 00001360A
- 10A 2

- 山梨 0010000001
- 123456789
- 山梨 00001360A
- 10A 2

- 山梨 0010000001
- 123456789
- 山梨 00001360A
- 10A 2

- 山梨 0010000001
- 123456789
- 山梨 00001360A
- 10A 2

- 山梨 0010000001
- 123456789
- 山梨 00001360A
- 10A 2

- 山梨 0010000001
- 123456789
- 山梨 00001360A
- 10A 2

- 山梨 0010000001
- 123456789
- 山梨 00001360A
- 10A 2

- 山梨 0010000001
- 123456789
- 山梨 00001360A
- 10A 2

(指揮)市村、阿形、齋藤、都筑、安部、土生、丸山、飯田、野口、箕輪、武井、鹽入、宇田、富士、柴田、日幡の諸君である。

ヒュッテを文部省に寄附 菅平スキー場に建設した母校校友會のヒュッテの建物及土地一切は今春三月三日附文部省へ寄附出願中の處十月十六日附受領方認可された旨十五日校友會へ通知があつた。従つて今後一切が學校の所有となるが利用上には變りはない。

第廿一回陸上大運動會 上田市名物の一つとなつてゐる第廿一回母校陸上大運動會は十月十八日午前九時より母校々庭に於て開催された。前夜は例に依り各科應援團の街頭デモがあつた。運動會は三科選手應援團の入場式より開始された。例年の通り養蠶科は壽司、汁粉、團子等の食堂を開設し、製絲科は眞綿、石鹼、縫絲、風呂敷、紡織科は縫絲、靴下、タオル風呂敷、反物等の賣店を出し修己寮も食堂を開いた。この日の天気は今にも雨が降り出しそうなる曇天、コンデションは頗る悪かつたが市民待望の催しとして朝早くから詰め掛け觀衆は數千に達し運動場に溢れ賣店食堂は大抵賣切れとなつた様である。呼物の餘興は絲二が「町を歩けば」と題し町で拾つた様々な人間に扮装したものと、蠶二の「東西古今アベック大會」と題しありとあらゆるアベックを並べたものを出し大喝采を浴びた。對科競技は劈頭の百米競走に於て物云ひが付き廿六回四百米競走以後の對科は養蠶科の不出場となり製絲科、紡織科のみにて雌雄を決する事となつてしまつた。當日審判係であつた筆者は百米を六等迄制定する事は無理であるといふ感に感した。競技開始が遅かつたのと對科競技の閉着等に依り思はぬ時間を費やし學校長の訓示に依り終了せるは六時に近く四邊は全く暗黒となつてゐた。對科競技の成績を左に示す。

- 7、百米競走
- 1 兒玉(蠶三)十二秒五分ノ二 2 坂谷(絲一) 3 柳澤(紡二) 4 武井(絲一) 5 矢崎(紡三) 6 平子(絲一) 8、八百米競走
- 1 土屋(絲三)二分廿三秒五分ノ一 2 佐藤(絲) 3 生天目(蠶一) 4 諸岡(紡三) 5 柳澤(紡三) 6 谷澤(蠶一) 10、回盤投
- 1 小松(絲三)廿八米一四二市原(蠶二) 3 日幡(絲二) 14、二百米競走
- 1 兒玉(蠶三)廿五秒五分ノ二 2 坂谷(絲一) 3 武井(絲一) 4 有川(蠶一) 5 矢崎(紡三) 6 小山(蠶一) 19、走高跳
- 1 飯田(紡一)一米六〇 2 矢澤(紡三) 3 日幡(蠶一) 22、砲丸投
- 1 平子(絲)二十一米六六二平林(紡二) 3 小松(絲三) 26、四百米競走
- 1 土屋(絲三)一分五分ノ二秒 2 佐藤(絲一) 3 鈴木(蠶一) 4 伊比(蠶二) 5 武井(絲一) 6 久芳(紡三) 29、三段跳
- 1 磯部(絲二)二十一米一五二伊藤(紡二) 3 下田(紡一) 34、槍投
- 1 日幡(絲二)四十二米一三 2 岩本(紡三) 3 小松(絲三) 45、千五百米競走
- 1 柳澤(紡三)五分十分五分ノ二 2 土屋(絲三) 3 佐藤(絲一) 4 小松(絲二) 5 矢澤(紡三) 6 諸岡(紡三) 50、棒高跳
- 1 飯田(紡一)二米八一 2 近藤(絲二) 3 伊藤(紡二) 55、走幅跳
- 1 飯田(紡一)五米六四 2 磯部(絲二) 3 外城(絲二) 60、長距離競走
- 1 長澤(蠶一)四十一分三十九秒 2 柳澤(紡三) 3 古田(絲三) 4 西井(絲一) 5 北澤(絲二) 6 小松(絲二) 7 山岸(蠶一) 72、八百米競走
- 1 製絲科 坂谷(一年) 平子(一年) 日幡(二年) 武井(一年)

紡織科三年生卒業製作題目

- 絹紡絲の下熱と強伸力との關係 (目崎助教授) 岩崎 正典
- 生絲の加熱と強伸力との關係 (目崎助教授) 花岡 政庫
- ステープル ファイバーの強力を増大せしむる方法の研究 (香山助教授) 北澤 茂樹
- 密度を異にする綿布に於ける原絲と張力との關係 (野口助教授) 小林 典夫
- 絹紡絲の上熱と強伸力との關係 (香山助教授) 迫 繁
- 絹と人絹の交織物の染色に關する研究 (小松講師) 佐藤 佳良
- アルカリの羊毛繊維の強力に及ぼす影響 (香山助教授) 下世古廣志
- 凝固浴の組成が人造絹絲のフィラメントの断面に及ぼす影響 (香山助教授) 瀧澤 通
- 生絲染色標本製作 (小松講師) 千吉良長二 岩本 一郎
- 人造絹絲の染色試験 (石倉講師) 松本 浩 福島 虎
- 鉈仙の研究 (目崎助教授) 平野 庄一 諸岡 市郎
- 綿長を異にするステープル ファイバーの製綿歩留比較試験 (野口助教授) 矢崎 勝 久芳 大三
- 綿絲に對する奇性曹達の效果研究 (野口助教授) 柳澤 六平
- 綿絲の精練漂白 (野口助教授) 尾和 博行
- 生絲各種下液後の強伸力の變化 (目崎助教授) 村橋 増雄

倉澤教授退任部長に新任 庭球部長清水教授が今回退官されたのの後任として倉澤教授が十月廿一日附を以て新任された。

校友會誌懸賞論文決定 本年十二月發行される校友會雜誌第廿一號の懸賞論文題目十月廿四日左の如く決定した。

- 一、蠶品種問題に就て
- 一、多收獲養蠶法の批判
- 一、蠶絲業の將來性
- 一、濠洲羊毛問題と君國のステープルファイバー紡績業

全日本學生劍道聯盟大會に平林孝方君出場す 十月廿一日、十一月一日兩日名古屋市公會堂に於て第九回全日本學生劍道聯盟大會開催さる。母校よりは首將千吉良長二君(紡三)都合悪しき爲め平林孝方君(紡二)を送る。同君善戦良く務め諸強豪と接戦左の如き成績を得た。尙附近在住の木曾、高木、中川、小畑氏等の諸先輩殊に高木氏の絶大なる御後援を深謝する。

右試合を參觀した高木信雄君(紡十五)より和田教授左の書面があつた。

(前略)平林君出場の第十五組は明大淺川、關大菊地、早高太田等千軍万馬の選手揃ひにて平林君の奮闘は實に素晴らしいものでした。試合態度、意氣、技

相手	神谷保	淺川	小川	菊地	太田	平林	選手名(校名)
3	○	×	○	×	○	○	平林(上田蠶絲)
2	○	×	○	×	○	×	太田(早高)
4	○	○	×	○	○	○	菊地(關大專)
3	○	○	○	○	×	×	小川(名高商)
3	○	○	×	×	○	○	淺川(明大)
0	○	×	×	×	×	×	神谷保(東高工)

第十回代議員會開會通知

来る十一月二十二日(日曜日)午前九時より母校講堂に於て第十回代議員會を開會致します。支會長各位には管内代議員に御出席下さる様御配慮御願ひ申上げます。而して御參會下さる各位の御氏名を至急本會迄御通知下さい。

十一月十五日

千曲會

代議員會提出問題

- 一、東京千曲會に電話設置の件(東京)
一、代議員會に提出するべき豫算並に決算の兩書類を代議員會開會前各支會に提示の件(兵庫)
一、昭和十二年度本會歳入出豫算に關する件
一、昭和十年度本會歳入出決算並に財産目録承認に關する件
一、昭和十年度歳計剩餘金處分に關する件
一、母校創立二十五周年記念事業費收入支出決算に關する件
一、母校創立二十五周年記念事業費剩餘金處分に關する件(以上本會)

第五回蠶學談話會豫告

来る十一月二十二日(日)の代議員會の好機を利用して翌二十三日に左記内容を以つて蠶學談話會を開催する事に致しました。多數諸兄の御參會を希望いたします。

記

- 日時 十一月二十三日午前十時より
會場 上田蠶絲專門學校内
講演 午前十時より
遠藤教授 桑のグアイラス病に就て
會員研究發表 (午後一時より)
一、茅野 功 蠶のポリプロイデイに就て
二、山口定次郎 熟處理桑の澱粉量の變化
三、坂田 武 蠶卵催青致死因子に關し實用的品種應用の實驗例
四、勝又 藤夫 飼育場所飼育時期の差異と天蠶繭の性質
五、金崎 眞英 繭生産費低減に關する綜合試驗
六、蒲生 俊興 育蠶上に於ける變温と均一温度の比較

第十五回甘茶美術展覽會

例に依りアマチニア一諸氏の素朴なる藝術心の表れとも云ふべき懐かしい作品の數々を集めて此處に第十五回甘茶美術展を開催致します。會員諸氏の御出品と御鑑賞とを歓迎致します。

- 一、出品種目 日本畫、洋畫、書、寫眞、手藝、生花等
一、出品締切 十一月二十日限
一、會場 母校蠶室
一、開會期日 十一月二十二日—三十日
上田蠶絲專門學校甘茶會

本會記事

本會日誌

十月五日 千曲時報を今後新聞法に依り發行すべく層書提出す。
十月六日 代議員會提出問題送附方各支會長に依頼す。
十月七日 會員名簿調整上必要に付き支會員名簿の寫送方依頼す。
十月八日 理事會開會代議員會開會準備及及び寄附金採納其他に就て協議す。
十月九日 前靜岡縣蠶絲課長長玉木浪三郎殿より本會基本金中へ寄附金受納に付き取敢へず禮状發送せり。
十月十四日 宇都宮高農同窓會よりの中越に依り本會豫算書贈呈す。
十月二十二日 上田郵便局より振替貯金集金書用紙改正の件通知せらる。
十一月五日 理事會開會代議員會提出問題に就て協議す。
十一月六日 元宮城縣農林學校教諭の井出滿藏氏御逝去に付き電報を以つて弔意を表す。

會費領收 (十一月五日)

- 昭和十一年度通常會費納入者 (〇印は蠶絲學雜誌代共)
〇梶田 廣貞(蠶七) 後藤 仙彌(蠶九)
〇猪瀨 親二(蠶七) 清水 衛(蠶七)
〇矢内 良雄(蠶七) 〇山本友之(蠶七)
〇木内 茂雄(蠶七) 〇本間 國夫(蠶七)
〇出穂 敏三(蠶七) 〇藤井 四郎(蠶七)
〇市川 省三(蠶九) 〇平尾 孝平(蠶九)
〇加藤 彰夫(蠶七) 〇森山 孝昌(蠶九)
〇有我 良吉(蠶七) 〇甲本 正道(蠶七)
〇三ヶ田 正次(蠶七) 〇兒玉 來(蠶七)
〇松井 辰巳(蠶七) 〇六川 忠行(蠶七)
〇野田 太郎(蠶七) 〇丸川 功(蠶七)
〇石井 清六(蠶七) 〇金丸 忠士(蠶七)
〇益洲 誠正(蠶七) 〇上木 英後(蠶七)
〇小川 貞雄(蠶七) 〇宮原 良豆(蠶七)
〇飯島 眞雄(蠶七) 〇小林 日比野一夫(蠶五)
會則第九條第一項第二號による
一時金貳拾圓也 日比野一夫(蠶五)

廿五周年記念事業 釀出金納入報告 (第廿四回)

- 金拾圓也 〇中澤利三郎(蠶一七)
金四圓也 〇紫田 末治(蠶九)
合計金拾五圓也
金六圓七拾錢也 昭和十一年上半期利子
金四圓貳拾錢也 風呂敷賣却代
金四拾五圓五拾錢也 風呂敷賣却代
合計金五拾六圓四拾錢也
累計金貳萬參千五百拾壹圓五拾貳錢也
(正誤訂正) 第廿二回釀出金報告中左記

の項目は左の理由により訂正す。
金四拾貳圓貳拾錢也 貯金局書換へ
金四拾七圓六拾錢也 (重復に付き)
(記念品代支出を減ず)
從つて右累計及合計も右の金額だけ減す

早川先生記念品贈呈

- 金五圓也 高木 三治
金四圓也 高木 三治
岸山 二六郎 高木 三治
森山 喜六 高木 三治
飯島 喜六 高木 三治
金貳圓也 須田 國之助
金貳圓也 須田 國之助
金貳圓也 須田 國之助
金貳圓也 須田 國之助
金貳圓也 須田 國之助

叙任辭令

母校之部
十月一日 從四位勳三等 和田仙太郎
十月五日 從四位勳三等 成瀬 次男
十月十日 依り履ヲ免ス
十月十二日 依り履ヲ免ス
十月十四日 依り履ヲ免ス

御寄附

前靜岡縣蠶絲課長長玉木浪三郎殿より今般本會基本金として金貳百圓也御寄附を受く。洵に奇特の至りにて感謝に不堪次第なり。因に玉木浪三郎殿は本會會員玉木勝彦氏(蠶一)の嚴父にして東京高等蠶絲學校の御出身なり。多年府縣の蠶絲業行政に盡瘁せられ日本に於ける蠶絲業の功勞者にして本校出身者も亦多數一方ならぬ御指導御庇護を蒙りたる恩人なり。

卒業生之部

- 公立實業學校教諭 小澄 晋
公立實業學校教諭 中澤 勝也
公立實業學校教諭 田口 敏夫
從五位勳五等 田口 敏夫
從五位勳五等 田口 敏夫
從五位勳五等 田口 敏夫
從五位勳五等 田口 敏夫
從五位勳五等 田口 敏夫

支會通信

朝鮮同窓の集ひ

この秋風光明の地海州に會てない盛事が催された。其れは十月五日から五日間朝鮮同窓會、同窓會、並黃海道會同主催の下に行はれた第十二回同窓會...

龍川會秋期總會

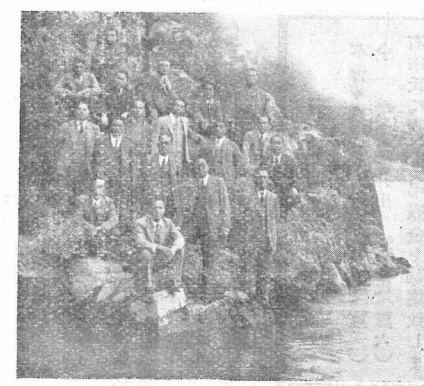
「馬鹿ア云ふな」

伊那電の軌道は羊腸の如くよく屈曲しなす。他にこれと並んで走る對照物がないため速い様ですがそれ程の事もない様です...

「あれが烏帽子岩、あれが龍角岩、川幅は狭いところだ。五間はあるかな」それから川下へ向つて少し急坂を登る。飛んで居るのは赤トンボかな。悠々と居る。トンボだらうな...

「龍川を過るのです。十月二十五日の午後七時と云へばもう眞暗です。飯田へ来る途に殆んど降りて終ひました。私達は其の夜更けて、しつとりとした飯田の夜霧にしみんと濡れて見ました...

たのだらう。珍珠はもう餘すところ如何ほどもない。此の頃から餘興が始まります。拍手が出る、ソプラノ、歌謡曲、民謡、物指を腰に差しての劍舞、詩吟、映畫説明、窮したあげく「乃木大將陣中作、一戸兵衛書の詩」がとぞのお宮にあると逃げた人もある。十八八分の煙草のけむりが霞んで見える程渦巻いて居る。空気が相當ドボンで来て居ます...



龍川會 浦生 十月二十五日 於 龍川 天龍川

山陽千曲會總會

廿五周年記念祝賀會直後の豫定が延び、  
支會總會、あの飲めば譯る千曲會先輩後  
輩の距を取つて痛飲の快を味ひつゝ、平  
素の苦を訴へ快を傳へる同窓會は、頃も  
よし十一月一日、所はA魚とB人のCや  
くD心持に酔ひ、F、G、つにHん味がI  
變らず、たくにKさいに喰ひ、尾道第一の  
料亭魚信(尾道灣を眼下に見降す階上の  
大廣間)にて開催。午前九時召集ありし  
に待遠くて前夜より待機の姿勢ありし  
中島氏(岡山)、長州より馳せ上りし山本  
内田兩氏を初めとし、集まる者支會長以  
下一騎當千の強者揃ひ十五名。  
先づ名に負ふ千光寺へ参詣、奇岩聳え老  
松翠深き中を石段傳ひに登れば尾道全景  
一望の裡に展開す。今日開壇早々といふ  
菊花展に母校の先生以上のキツイ探點投  
票したつて下山、直ちに天下に其の名稱  
へらるゝ淨土寺山公園へ折山、三々五々  
自動車に分乗し七曲り九折山の險を冒し  
てのドライブ、キレイな連中同伴の爲め  
か平素は自動車に弱くてすぐ窮蹙だ、道  
が悪いとこぼす御仁も今日ばかりはモツ  
ト乗つてみたい顔、頂上に達すれば瀬戸  
の海に點する大小無數の島々、それを  
縫ふて往き交ふ眞帆片帆、さながら一の  
名畫に一同唯エ、ノ(良いね)の連  
發、小川支會長のメモアに富む支會報  
告を兼ね時報以外の機秘に屬する千曲會  
の動靜に就いての話ありし後、代つて土  
岡幹事より山陽支會の隆々たる發展振  
りの詳細を聞き祝電の披露後下山、時正に  
十二時、暫時黒白を競ふ中に用意万端出  
來上り土岡氏の開會之辭により祝宴に入  
る。美妓のサービスよろしく満座に漲る  
物凄いな賑かき、昔日の學生時代のパン  
ラ振りをアチまけた脱線振り、坐しては  
大いに飲み、大いに語り歌ひ、立つては  
木曾節ござれ、伊那節、おけさ節、はて  
は奈良の正倉院一年一度の開館といつた  
調子にモトのか、つた粹な所の研究發表  
全く大氣焔、メートルはヒーカー博士  
の作りしレコード以上の高昇振り、和氣  
爆笑窓外にあふれ、爲に窓下を行き交ふ  
物見高い船客の移動に船もコチラに傾い  
たか。  
一刻千金の時も一瞬の間に過ぎ去り、  
終りも近づけば、淺間の煙は望み得ず、  
北アプルス白雪は眼に寫らずとも、在

りし學生時代の純心に歸り一同聲高らかに心の底より、  
「御國の爲めに丈夫が、富の基をきづか  
かんと、蠶絲の道を究めつゝ、盡す誠  
の跡みよや」  
を齋唱する時會員一同の感激はさる事乍  
ら美妓連もその最前と打つて變つた嚴肅  
なる雰囲気中心打たれしは感慨無量の  
態、歌ひ終りて支會長の發聲により、千  
曲會萬歳、萬々歳、山陽支會萬歳と叫び  
つゝ、

尾道乙女の情にぬれてヨ  
朝の別れに 千ぬ涙ヨ  
エンヤラホ、ギツチャラホ、エンヤラホ  
遠來の方々は盡きぬ名残りを惜みつゝ、東  
西に離れ、近在の者のみ支會長に命の質  
預けよるしく、萬一の際はご職業柄よい  
種を托しつゝ、フグのさし味、フグのチ  
リに舌打ち盡きぬ餘程に花咲かせ、愈  
々の千秋樂は午後八時、終日のアルコー  
ル濱けに酔眼朦朧、併し心臓強き面々は  
程遠からぬ〇〇町に歩を向けんとせりも  
東や大阪、西、下の關ヨ

エンヤラホ、ギツチャラホ、エンヤラホ  
維新前よりの開港地なれば培養器より白  
金線にて取出した許りのもの程左様に新  
鮮なる〇〇を頂戴に及ぶは物騒と素直に  
車の人となる所に、さすがに顕微鏡と首つ  
引きで修學之れ勉めた千曲會員の眞面目  
と感心しつゝ、擲筆。  
因に當日参集されし御仁、乃ち銘酒の産  
地山陽にお勤め來すつかりヒゲリツチ  
ヨになられた面々を年度順に紹介せん。  
小川保(蠶一) 四圍を歴する雄大なジャ  
イアントとして、よく同氏と一度接する  
人々の腦裡に深く刻むその人格の表れ、凡そ  
聲望高き同氏も、パイ一召上れば、凡そ  
体とは不似合の細い可愛い聲で味な所を  
發表してウフ、と悦に入つて御座る所が  
さすがに支會長たる所以だ。

小川敬一(蠶二) 英國型の義厚なる紳士  
一年の中華は海邊住ひ半ば義兄氏のより  
よきアツシスタントとして山奥住ひ自然  
の然らしむる所か、ホルモンの調整よろ  
しくお子供さん四人もお持ちになつてホ  
ク、(蠶三) 蠶軍艦の恐れあり  
小林輝一(蠶四) オチシと菩薩ととの  
間に出来た人になつた人みないに頗る温厚  
篤實な方、マア佛さんと思へば間違ひな  
い。所が此の人の持論が奮つてゐる。曰く  
平素はいくら勤節約するも至極結構な  
れ共千曲會如きには萬障繰合せて出て來  
ない様な人は所謂世捨人の中に屬すとて  
支會開催以來の精勤振り。

中島静太郎(蠶五) 農林學校の大黒柱と  
同時に岡山縣に於ける千曲會の重鎮、近  
來メキ、と肥つちやつた勢が大の相撲  
氣狂ひ、同校が縣下に於いて近年連續制  
覇の實の入れ方はハテサテ。  
土岡光郎(蠶七) 教頭の地位に居らるゝ  
共實權たるや正に校長、地方の爲めには  
農民道場を開き青年子女の訓育に餘念が  
ない東備後に於ける大きな存在。名支會  
長をなさしめたるよき女房役、今回幹事  
の辭表提出されたも満場一致撤回を決  
議したるは當然と云はねばなるまい。  
日野光平(蠶八) 超君子と云へる紳士に  
して恐らく千曲會員唯一の女專の先生、  
片割れ氏諸君にしてインテリ級に屬する  
片割れを求むる御仁は同氏の訓育による  
廣島女專出を同氏を介して御所望あらん  
事。

杉本政義(紡一) 胃潰瘍にて生死の境を  
彷徨はれしも現在はすつかり全快、斯界  
の爲めに大奮闘、東洋麻絲工場の仕事主  
任と云へばあまりニラミのきかなかつた  
母校の先生時代に引換へあゝ象マナコ  
一睨みに縮み上がる配下八百人とは嬉し  
い話。  
白井要範(綿二) 検定所の中堅とは言  
ふ丈やば、本縣統制蠶絲業の中心人物、  
その敏腕に望まざるゝ處大なり、四疊半  
向の粹人なれ共、踊りは素人離れした腕  
前。  
金子幸一(蠶三) 口八丁手八丁とは全  
く同氏に於て言ひ得る言葉、岡山の中心  
にありて手腕發揮、英雄酒を好むの例に  
洩れず、此の道も行く所可ならざるはな  
しの懸、片倉節と銘打つて全國の俚語民  
謡の輸入元賣捌所の感ある藝達者。  
山本誠(蠶一五) 那農會の山本さんより  
オートバイの山本さんといへば界限子供  
に至る迄知らぬ者はない程操縦の達人、  
併しカヒコとアノコの操縦には一生苦勞  
するとは御尤も御尤も。  
和田益己(綿一六) 學生時代より万事に  
領よく立廻る御仁、且ての應援團長パツ  
パツの指揮よろしく部下を統率する技  
に秀で將來有爲の青年技術家。  
上垣内武彦(紡八) 學生時代漁夫の作と  
自稱し通した男丈あつて相變らず色は黒  
いが腹の中は白いと猿年生れとて何時迄  
も茶目氣は多い、狸々に似て酒にのきな  
い男、最近諸曲、仕舞の稽古に餘念がな  
い。

内田幸成(綿一六) サボに於ては一方の  
旗頭だつたからケツト小脇に飄たる姿  
に持て囃されたりからウーさんウーさん  
の白狀實は女は大嫌ひとはどうかと思は  
れます。  
尾崎利雄(蠶一八) 信州仕立ての色男、

計報

御逝去通知

井出滿藏氏(蠶六) 前宮城縣柴田農林  
學校教諭の同氏は十一月一日御逝去せら  
る。  
御遺族 神奈川縣高座郡老名村大谷  
令閨 井出きた子  
嗣子 全昌 志

弔慰金募集

本會々員 故田口 恒夫氏(蠶三)  
全 故井出 滿藏氏(蠶六)  
右兩氏に對する弔慰金を募集致しま  
す。然して田口氏の分は十一月末、  
井出氏の分は十二月一月末迄に取纏  
め御遺族へ贈呈致し度いと思ひます  
から夫れに間に合ふ様振替口座東京  
四三三四一番へ夫々同氏弔慰金の旨  
御記入の上御拂込下さい。  
昭和十一年十一月  
千曲會

弔慰金報告

故塚田卯平太弔慰金第三回  
金參圓也 三好 彌市  
金貳圓也 牧野 春雄  
金壹圓也 依田寛之助  
右合計金拾壹圓也  
故喜多尾猪門氏弔慰金第三回  
金貳圓也 六川 忠行 藤森 明美  
金壹圓也 宮下文四郎  
右合計金七圓也  
故田口恒夫氏弔慰金第一回  
金貳圓也 芝野 三郎  
金壹圓也 石原滿洲夫  
右合計金參圓也

新任御挨拶

謹啓、秋冷之候各位愈々御清適之  
段奉慶賀候、陳者従前は種々御高  
配に預り誠に有難く奉深候、今般  
小生御蔭を以て母校養蠶部副手  
して勤務致す事相成候間今後倍  
舊の御指導御鞭撻賜度奉懇願候、  
先は略儀以誌上御挨拶申上度如斯  
御座候、 敬具  
昭和十一年十月  
山崎嘗録

新任御挨拶

拜啓、初冬之候愈々御多祥之段奉  
大賀候陳者小生儀今回本校圖書課  
に勤務致す事相成候に就ては今  
後何卒宜敷御指導御鞭撻賜度奉懇  
願候、先は乍略儀以誌上御挨拶  
々御願迄申上度如斯御座候、 敬具  
昭和十一年十一月  
松田明文



小ツア乍ら口八丁手八丁、尾道娘をクド  
キ損ねて交換條件として三年越の大作ドジ  
ヨウ鬘を落とせば仰せに従ふにはさすが  
のオーさん、金的を射落す調子に行かず  
かゆし、いたし。(十一、三苦勞生記)

山陽千曲會  
昭和十一年十月  
山崎嘗録



